

多国間ネットワークによる遠隔交流活動の実践 ——新たな学習環境作りをめざして——

吉田 直子

1. はじめに

2009年度後期、チェンマイ大学日本語学科では世界の7カ国7大学合同で行われた遠隔交流プロジェクトに参加し、タイにいながらにして日本ほか様々な国で日本語を学習している大学生と交流する機会を得た。

海外における日本語学習者の多くは制約された学習環境の中で日々学習しており、教師には日本語を実際に使用するための機会提供やリソース活用などの学習環境作りが求められている。本校においても、これまで在留邦人やチェンマイ訪問中の日本人大学生との交流の他、遠隔交流では日本人大学生との手紙交換など、教師以外の日本人リソースを活用した活動を行ってきた。さらに最近ではIT技術の進展に伴い、スカイプやTV会議システムを利用してリアルタイムに遠隔地とコミュニケーションする交流活動も試行されるようになってきている。

このような活動における交流相手は従来日本語母語話者である日本人であったが、今回は世界7カ国の大学にまたがる日本語母語話者も含む多様な文化背景を持った日本語学習者同士の交流という点で、本校においては新しい試みであり、日本語教育における文化理解教育のあり方、多国間ネットワークというリソースを利用した学習環境作りを考える上で有益な実践となった。本稿ではこの教育実践例について報告する。

2. 遠隔交流プロジェクト

2.1 概要

本プロジェクトは2009年に世界7カ国7大学によって立ち上げられた多国間ネットワークによる合同プロジェクトであり、①文化教育を言語教育に取り込む総合的教育、②グローバル化時代に求められる多文化教育、③多言語使用環境構築を目標として実施されたものである⁽¹⁾。2009年度は「ステレオタイプとその実際」というテーマのもと、7カ国7大学からの参加により行われた。参加大学は以下の通りである。

お茶の水女子大学（日本）、釜山外国語大学（韓国）、ヴァッサー大学（アメリカ）、ボン大学（ドイツ）、カレル大学（チェコ）、ワルシャワ大学（ポーランド）、チェンマイ大学（タイ）

この中で国籍が単一だったのは韓国とタイのみで、残り5大学の教室は留学生が混在しており、参加者全体の国籍数は15余りにのぼった。日本からは日本語教育や文化を学ぶ学生が、日本以外からは日本語専攻、日本文化専攻の学部生、一部院生が参加した。本校からは日本語主専攻の3年生31名

が参加した。各大学によってプロジェクトを取り入れた授業も参加者の日本語のレベルも異なっており、実施期間も各大学により多少前後しながらも、以下の実施手順に従ってパワーポイント作品の交換を最終目標として進められた。

2.2 プロジェクト実施手順

時期	活動内容	随時
10-11月	「ステレオタイプ」についてのアンケート実施と結果の交換：7カ国互いに、他国の社会、文化、人に対する知識やイメージについてアンケート調査を実施し、集計結果を交換	Web掲示板での交流：アンケートやパワーポイント作品についての質問やコメントなどのやりとり、パワーポイント作品の閲覧
11-12月	アンケート分析：アンケート結果を受けて、自国のイメージについて発信したいテーマを決定	TV会議による交流：自由参加
12-3月	パワーポイント作品交換：選んだテーマについてパワーポイントにまとめ、自己紹介、ナレーション録音を付けた作品をWeb上に公開	

3. チェンマイ大学における実践

3.1 目的

本校では2009年度後期にあたる2009年10月から2010年3月に渡って、日本語専攻3年生必修科目の会話・聴解⁽²⁾の授業の中で本プロジェクトを実施した。本校における実践の目的は、大きく以下の2点である。

3.1.1 文化理解教育を取り入れる

近年の世界各国の外国語教育では、言語知識や技能だけでなく異文化理解や異文化間コミュニケーション能力育成が重要視される傾向にあり、日本語教育においても重要な目標になってきた(北出2010)。グローバル化が進み、ボーダレスな人々の移動や情報の交流により異文化を意識せずに生活することが少なくなりつつある現代社会においては、日本語教育に関しても日本語能力以外に文化を異にする他者を受け入れ、他者との関係を作っていくコミュニケーション能力育成が求められるのは自然な流れといえるかもしれない。しかし本校での異文化交流活動を振り返ってみると、日本語教室の中で扱われる異文化は日本文化に限定されていたように思われる。

本校の学生も日本へ留学すれば、世界各国からの留学生たちと日本語を介してコミュニケーションする場面に遭遇する。しかし今回参加した3年生の時点ではまだ留学経験者はほとんどおらず、異文化交流をしたことはあっても、交流の相手はたいてい日本人である。また、クラスはタイ人学習者で

占められているため、交流は自ずとタイ人と日本人の2国間交流になる。言語教育における異文化交流は母語話者(NS)と非母語話者(NNS)が典型的なパターンであるとされるが、タイでは日本人とタイ人学習者が参加者となり、内容的にも日本文化理解、またはタイ日文化比較が扱われることが多い⁽⁴⁾。

もちろん言語と文化は切り離せず、日本語学習者が日本文化を学ぶことは必要であるが、最近では日本でも日本語母語話者が非母語話者と日本語で話す機会が増え、日本人にもこうした人々との共生のためのコミュニケーション能力が必要とされるようになってきており(二通2006)、日本語によるコミュニケーションの相手も多様化している。このような時代、日本語教育においても「異文化」というものを日本文化に限定せず、より広く捉えることが必要になってくるのではないだろうか。

そこで多国間ネットワークを利用し、多文化理解を目標とする交流活動を授業に取り入れることは、教師にとっても学習者にとっても日本語教室の中の「異文化」に対する固定観念を取り払い、「多文化」を意識するのに効果的であると考えた。文化背景の異なる日本語学習者(日本語母語話者も含む)と日本語を媒介して交流することで、日本語によるコミュニケーションの多様性をも体験することができる。

3.1.2 内容重視の学習を取り入れる

本プロジェクトを取り入れた日本語主専攻3年生の会話・聴解の授業は、機能シラバスを中心とし、待遇表現を用いた談話構成能力を向上させることがねらいで、社会文化面にも配慮した場面を設定し、会話練習やロールプレイなどを行っている。特別活動として日本人を教室に招いてビジターセッションを行うなど実際のコミュニケーション場面を設定することもあるが、通常は日本社会に適応でき、日本人とのコミュニケーションに支障が生じないような、言語技能習得や言語文化知識に重点を置いた教室活動が主である。しかし教師が設定した疑似体験的な場面での練習について、細川

(2007:81)は「実際のコミュニケーションとの乖離を生み、学習者の意思発信への内的動機がそがれる危険がある」とし、阿部(2007)も他者依存的な活動であると批判した上で、学習者を他者との間で考えや価値観を交換し合う主体と見なすことの必要性を説いている。

3年生になると日常的な簡単なやりとりはできるが、もう何年も日本語を勉強しているのに言いたいことが思うように言えないといった壁にぶつかり、学習意欲を減退させたり、学習目標を見失う学習者が見られる。そのような中、上の指摘は学習意欲を高め、コミュニケーション能力を向上させる教室活動を考える上で示唆するところが多い。

本実践では学習者が自分と関連付けを行いやすい「文化」を切り口に、日本語を介して多様な他者との間で情報交換を行うという内容を重視した活動を取り入れることで、学習者が主体的に日本語を使う機会を提供することをめざした。さらに明確な活動の目的、具体的な交流相手が存在することで、日本語使用動機や学習動機を向上させることができると考えた。

3.2 実施の流れ

先述のプロジェクト実施手順に従い、本校では個々の活動を以下のように通常の授業、または授業外活動として組み込みながら進めた。

(1) 「ステレオタイプ」に関するアンケート結果のフィードバック

本校学生の他国についてのアンケート結果、および他国のタイに関するアンケート結果を授業で紹介した。本校学生の間では、アメリカ、日本、韓国については、社会や人に関する多くのイメージが出されていたが、ポーランド、チェコに関してはイメージがないと回答した学生がかなりの数にのぼった。そこでクラス全体で特定の国からの影響力の大きさ、情報の隔たり、関心の対象など、その理由について考えてみた。

一方、各国のタイに対するイメージの中で、肯定的、中立的なものには、仏教、観光、国王、料理、明るい性格などがあり、否定的なものには、セックス観光、貧困、怠惰などがあつた。否定的なイメージ、とくにセックス観光というイメージが複数国から出されたことは、学生達にとっては意外だったらしく、ショックを受けた学生もいたため、なぜそのようなイメージが大きいのか、現実問題としてはどうか、自分たちとの認識の違いを考えるよう促した。

(2) パワーポイント作成／グループ作業（授業外）

アンケート結果を踏まえ、各グループでそれぞれ関心のあるテーマをひとつに絞らせた。グループごとに、テーマについてイメージが実際と異なる点、他国の学生に伝えたいことなどについてまとめ、パワーポイントのドラフトを作成し、クラスで発表した。学生が選んだテーマは「タイ料理」「貧富の差」「ニューハーフ」「セックス観光」「タイ人」の5つである。

(3) クラスでの発表と意見交換

クラスで各グループの発表を聞き、意見交換を行った。ここではタイ語使用を認めたことでクラス内で活発な意見が出された。例えば、「タイへ来る観光客の目的を調査したところ、セックスは上位には見られなかった。だからセックス観光は多くない」と発表したグループに対し、「そういう目的はデータには表れにくいかも」「身近ではなくても、多いことは認めた上で、タイ人一般や自分たちの意見を伝えてはどうか」などの意見が出された。

また、テーマが広く内容が散漫だった発表に対し、「他のグループと重なる部分を削り、焦点を絞ってはどうか」といったコメントもあった。グループ間の調整を図り、クラス全体で「タイ」について発信するという態度が見られた。

発表の技術的な面では、根拠となるデータを示し、わかりやすくパワーポイントを作っているグループの発表を聞く中で、事実と意見の区別のしかた、ポイントの絞り方などパワーポイントの効果的な使い方について、互いにコメントしあう様子が見られた。

(4) グループ作業（授業外）

グループ発表に関してクラスメートのコメントを受けた後、授業外でグループごとに教師からもコメントし、「何を伝えたいか」「どのように伝えるとわかりやすいか」について再度考え、パワーポイントを修正した。そこに自己紹介を加え、声を録音して作品を完成させた。

通常の発表では、発表すること自体が目的となってしまうがちだが、今回はクラスでの討論やパワーポイント修正作業においても、「他国の大学生が見る」「他国の大学生に伝える」という目的を意識している様子が感じられた。

(5) パワーポイント視聴

パワーポイント作成作業と平行して、他国から届いたパワーポイント作品をいくつか視聴した。また、本校学生による完成した作品もクラスで視聴した。顔写真を見たり声が聞けることで、直接ではないが交流相手を身近に感じる事ができたようである。

この他、Web掲示板やTV会議などの交流があったが、技術面、時間、参加人数の面などで今回はTV会議参加を見送り、Web掲示板は積極的活用を呼びかけたが、基本的に自由参加とした。しかしタイへの他国からの質問に対して回答の書き込みがなかったため、質問を授業で紹介し、指名して返事を書かせた。

4. 学習者からのフィードバック

プロジェクト終了後に学習者へのアンケートを実施した。質問項目はプロジェクト全体、テーマ、交流相手、TV会議、Web掲示板、文化理解、日本語に関するもので、5段階評価による回答と記述式回答である。プロジェクト参加については「大変よかった」「よかった」が88%、テーマについては「大変よかった」「よかった」が72%、活動を通しての日本語スキルの向上についても「大変学べた」「学べた」との回答が76%を占めた。他国の文化への理解が深まったかどうかについては「とても深まった」「深まった」が56%、自国の文化に対する理解が深まったと回答した学生は68%であった。

以下は「深まった」と答えた学習者の記述式の回答である。

- * タイについてマイナスイメージ (sex) がある
- * タイについてのイメージは事実と違うこともある
- * タイは貧乏な人が多い
- * タイの貧乏や出家や王様について、他の国に正しい内容が伝えられた
- * 自国の文化 地方の文化、食事の文化。
- * 他国の人がタイについてどんなイメージを持っているかわかった
- * 他の国のことでかんちがいしていたことがあった
- * 他国の歴史、事情、服装など
- * ドイツでも日本でも飲み会の習慣があること、韓国が整形大国第一ではなかったこと

- * 自国について深く考え、他国について知らなかったことがわかるようになった。例えば食生活や性格など (5)

「自国文化の理解が深まった」ということに関しては、他の国からタイがどのように見られているかがわかったという意味合いが強く、肯定的なイメージについてはほぼ予測どおりであったためか、否定的なイメージが強く印象に残ったようである。

他国に関するイメージでは、地理的に身近な国や世界で影響力を持つ国についてはある程度記述できたが、そうでない国についての関心の低さ、知識のなさが浮き彫りになった。これは日頃からニュースなど世界情勢への関心の低さが表れたものであろう。今後交流したい国として挙げられたのもイギリス、フランス、近隣のアジア諸国がほとんどであった。

Web掲示板を見たのは56%、その内書き込みをしたのは50%であった。その理由として71%10人が「時間がない」を挙げている。しかしながら、「今後、他国の作品を見たい」との回答が100%、「自分の作品を見てほしい」が84%を占め、「TV会議をしてみたい」も92%にのぼっていることから、パワーポイント作品以外で他国の学生との交流に興味を示す学生が多いことが伺える。

Web掲示板の交流でよかった点

- * コメントができる
- * 自国のことがわかった
- * かんちがいしていたことがわかった
- * Vision が広くなった
- * 自分の考えを表せる (2)
- * 他国のことがよくわかる (3)

全体的な感想、意見

- * 面白くて役立つプロジェクトなので、続けてほしい (3)
- * タイは Sex trade の国ではない (2)
- * 日本語を勉強しているほかの国の学生を見たり、声を聞いたり、面白かった
(いろいろな日本語の発音を聞いて、気が楽になった)
- * 他の国から見るとタイは貧乏かもしれないが、そうではない。
- * タイのことをわかってくれるとうれしい
- * 悪い点をもっと知りたいし、理解したい
- * 大学生活について交流したい
- * PPT を作ったり、発表したりするのは時間がかかるから、メールをやりとりするほうが
いいと思う
- * 外国の学生と交流するのはとてもいい。会話できればもっといいと思う

5. 成果と問題点

5.1 文化への新しい視点

今回のプロジェクトでは、特に本校の学生に関してはWeb掲示板上の積極的な交流があまり見られず、TV会議に参加しなかったため対面式のやりとりもなかったことから、パワーポイント作品交換が主な活動となった。授業で視聴した他大学の作品に学生たちは大きな興味を示したが、各大学の完成時期のずれや時間的な制約から、紹介できた作品はごくわずかであった。アンケートでは全員が他国のパワーポイント作品を「これから見たい」と答えているが、学期が終了してしまいフォローアップできなかった。そのため、他国の文化への理解は他国の作品やWeb掲示板への学習者個々の利用の仕方に負うところが大きく、授業内でクラス全体で共有することがあまりできなかった。

しかし、少なくとも「日本に適応させるため」「日本とタイの相互理解のため」ではない「文化」を認識することができたのではないだろうか。異なる文化背景を持つ他者との交流は、文化の多様性について想像力を働かせるきっかけになったであろう。例えば、チェコやポーランドの学生からはタイのイメージが比較的多く出されていた一方で、タイからのチェコやポーランドに対するイメージについては何も書けなかった学生が多かったことに「恥ずかしい」という声もあがった。そのような他国への関心の低さに気づけたり、世界の様々な国で日本に関心を持ち学習している学生達の存在を知り、身近に感じることは新鮮な体験となった。日本文化との相対においてのタイ文化ではなく、様々な文化に触れ、かつ世界の中の自国の文化を意識するなど、より広い視野で文化というものを捉え直すきっかけになったと考えられる。

森山 (2010:164) が「交流」が「言語と文化の壁」を解決すると主張するように、多国間ネットワークによる交流は、教室活動に文化理解教育や多文化の視点を取り入れる上で、有効な方法であろう。

5.2 日本語使用の動機向上

「タイが他国からどう見られているか」は活動を通しての学生の最大の関心の一つであった。特に複数国から共通して出されたマイナスイメージに学生の関心が集中したが、逆にそのようなステレオタイプは実際にはどうなのかについて伝えたいという動機付けとなり、内発的動機に基づいて日本語を使用することができた。

例えば、「セックス観光」というイメージがあることを認めつつ、「タイでは違法であり、仏教国なのでモラルにも反する」「タイの人々にとっては解決すべき問題だとされ、支持されていない」といった情報を発信できたことで、イメージを修正できたという自信につながったのではないだろうか。

「貧しい」というイメージについては、「農業国だから」「科学技術があまり進んでいないから」「メディアが貧しい人のことを報道するから」などいくつかの理由を挙げたりデータを示した上で、「イメージに出されたようにタイは裕福な国ではないし貧富の差はあるが、物価が安く、食べ物も自然も豊富で、国民は笑顔で暮らしていて幸せだ」「貧困かどうかだけで全て判断できない」という自分たちの抱えている豊かさの実感について伝えることができた。また「のんびりしている、怠惰」と

いったイメージに対して、「タイは農業国なので、欧米等の工業国のように競争することがあまりない」「社会や法律があまり厳しくない」と自分たちなりに客観的に理由を分析し、「のんびりするの
は悪い面だけでなく、ストレスが少ないなどいい面もある」というメッセージにまとめた。このよう
に経済や効率面のみを優先しない自分たちの考え方や価値観を伝えられたことは大変意義深い。

さらに、日本語でコミュニケーションするのは日本人といった固定観念を離れ、日本語という共通
言語を媒介として交流できたことはタイにいるだけでは得がたい貴重な体験であり、多国間ネットワ
ークによる交流の最大の利点であろう。交流相手が母語話者である場合のメリットもあるが、非母語
話者同士であれば同じ学習者という対等な関係で日本語を使うことが可能であり、互いに刺激し合う
ことで学習の励みにもなるというメリットがある。本プロジェクトは他国の大学生のみならず、共に
作業を行ったクラスメートも含めて、共通の目的を持って対等に学び合う協働作業であった。この作
業を通して自ら主体的に学習に関わる態度が見られたことは一つの大きな成果である。

5.3 授業枠内での実施

既成の授業枠内でいかにこのような活動を取り入れるかは今後も大きな課題である。まず本プロジ
ェクトを扱った科目であるが、本校では今回、会話聴解という授業内で試行した。言語スキルの向上
という面では、発表やパワーポイント作成、視聴などの面では学ぶことができたが、クラスメート以
外の海外の参加者と対面してコミュニケーションする場面がなく、会話聴解という授業に取り入れる
にはやや無理があったという反省が残った。

時間的にも、通常の学習項目を消化しつつ授業内でアンケート結果の紹介やパワーポイント作品の
視聴を行うのは困難であった。本プロジェクトのような長期間に渡る活動では、ある程度シラバスに
組み込めたほうが内容的にも時間的にも効果的かと思われる。

また授業外の自由参加としたWeb掲示板に関しては、パワーポイント作品交換後、Web掲示板で本
校の作品に関するコメントや質問などの書き込みがいくつかあったが、すでに学期が終了しており、
フィードバックすることができなかったのが残念である。各大学の時期のずれを考慮しつつ、最大の
効果が得られるように活動を設計する必要があるだろう。

6. おわりに

今回の反省を踏まえ、2010年度後期に始まったプロジェクトは会話・聴解ではなく、レポートライ
ティングの授業で実施された。昨年に比べ各大学間によるTV会議もより活発に行われた。TV会議な
ど対面式の交流を通してさらに相手を身近に感じることであれば、Web掲示板の利用ももっと活発
になるかもしれない。そしてこのようなリソースにシラバス外で自主的かつ積極的にアクセスするよ
うになれば、自律学習につながるという効果も期待もできる。

ネットによる交流や多国間の交流は今後盛んになるであろう。本校においても、より効果的な活動へと発展させるために実践事例を蓄積し、科目の枠を超えた学習者のための学習環境作りを模索していきたい。

最後に、プロジェクト代表であるお茶の水女子大学の森山新教授をはじめ、6大学の先生方に感謝の意を表したい。

注

(1) 本プロジェクトは、お茶の水女子大学の森山新教授が進めている「多文化・多言語サイバーコンソーシアム」という一連の活動の一つとして行われたものである。

(2) 「会話・聴解4」は日本語学科主専攻3年生の必修科目で、2009年10月～2010年2月の15週間、週2コマ各90分の授業である。レベルは中上級。

(3) 大橋(2006)は共生言語としての日本語を体験させるために実施した、海外4カ国の日本語学習者とのビデオレター交換プロジェクトについて報告している。

参考文献

阿部葉子 (2007) 「教室参加者の「相互関与」に着目するコミュニケーション活動 ―日本語教室の一元的コミュニケーションを越える視座に向けて― 『早稲田日本語教育学』 2007年9月第1号
早稲田大学大学院日本研究科、pp53-66

大橋由希 (2006) 「ビデオレタープロジェクトがもつ学習の可能性」 『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』 第3号、国際交流基金バンコク日本文化センター

北出慶子 (2010) 「留学生と日本人学生の異文化間コミュニケーション能力育成を目指した協働学習授業の提案 異文化間コミュニケーション能力理論と実践から」 『言語文化教育研究』 第9巻2号、早稲田大学大学院日本語教育研究科、pp65-89

倉地暁美 (2006) 「多文化共生のコミュニケーション能力とその開発」 『講座・日本語教育学 第5巻 多文化間の教育と近接領域』 スリーエーネットワーク、pp149-165

トムソン木下千尋 (1997) 「海外の日本語教育におけるリソースの活用」 『世界の日本語教育』 第7号、国際協力基金日本語国際センター、pp17-29

二通信子 (2006) 「国内の日本語学習者の場の広がり」 『日本語教育の新たな文脈 ―学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性―』 アルク、pp10-32

浜田麻里、林さと子他 (2006) 「日本語学習者と学習環境の相互作用をめぐって」 『日本語教育の新たな文脈 ―学習環境、接触場面、コミュニケーションの多様性―』 アルク、pp67-100

細川英雄 (2007) 「日本語教育学のめざすもの ―言語活動環境設計論による教育パラダイム転換とその意味―」 『日本語教育』 132号、日本語教育学会、pp79-88

森山新（2010）「グローバル化時代に求められる総合的日本語教育」『比較日本学教育センター研究年報』第6号、お茶の水女子大学比較日本学教育研究センター、pp163-169

李徳奉（2003）「転換期を迎えた日本語教育に求められるもの」『日本語教育』19号、日本語教育学会、pp1-10